

# 島全体で伝統文化継承

～学校・地域・家庭が一体となった連携～

## 1 はじめに

伊平屋村は、沖縄県の有人島として最北端にあり、今帰仁村運天港より41.1kmの距離に位置し伊平屋島と野甫島からなる島です。伊平屋島は細長い島で200メートル級の山々が連なっています。また、野甫島は伊平屋島西南端米崎より野甫大橋でつながる周囲4.8kmの大形状をした琉球石灰岩からなるなだらかな丘陵地です。

すぐれた自然環境を有していて、稲作やサトウキビ、漁業やもずく業が盛んに行われています。

本村は、人口1,200名ほどで、伊平屋島に小学校1校、中学校1校、野甫島に小中学校1校を有し、在籍する児童生徒は96名です。そのうち、野甫島に所在する野甫小中学校は、全校生徒が1名で令和8年度には、在校生が卒業し不在となり、休校措置が取られます。

## 2 伝統文化継承の背景・課題

伊平屋村の人口減少は、2005年の1,547人をピークに減少しており、国立社会保障・人口問題研究所によると、2035年には976人と1,000人を割り込むと推計されています。そのうち75歳以上人口が24.8%となる見込との視差であり、人口減少が深刻な上、少子高齢化の進行により、地域社会の担い手不足や集落コミュニティ機能の低下や、産業の人材不足による産業経済の停滞など様々な課題を抱えています。人口減少による地域力低下は村全体の重要課題であり、地域社会の担い手となる若者の定住化はその中でも大きな影響を受けています。

### (1) 村の伝統行事

本村の伝統行事は1年を通して様々な催しがあり、我喜屋地区で行われる綱引きや田名区では海神をお迎えし、豊漁を祈願して行われるウンジャミ、子どもの健康祈願のシヌグ行事などがあります。そのうち、各集落では旧暦8月11日から豊年祭が行われ、老若男女が五穀豊穡を願い芸能を奉納します。この時期になると、毎夜披露する踊りの練習や棒術の練習などで公民館は活気に満ち溢れています。



野甫区の豊年祭の様子

### (2) 課題

伝統行事は1年を通して様々な中、舞踊を披露するにあたり沖縄芸能には欠かせない三線や太鼓が近年課題となってきました。本村の演者は20年ほど前は60歳後半が大半で、4,5人程度の集落に在籍し、地域の演奏の要でした。現在では演奏出来る方が高齢となり、次世代への継承がうまくいかず、後継者育成が課題でした。

三線などはすぐに習得出来るものではなく、日頃から練習を行う必要があり、当時は三線を習う教室を開講していない状況でした。



豊年祭で駆けつけた応援の演奏者

ク業など最盛期と教室の開講日が重なってしまう場合など、開講が厳しいとの声が出るようになり、講師を引き受けてくださる地域住民が減少してきました。

## (2) 現状にあった取り組み

引き受けてくださる講師が減少していき、開講できる教室も減少して途中で、どのように持続可能な伝統文化学習を実施していくか模索し続けていく中、地域伝統を継承しつつ、伝統文化の後継者育成を行うには教室を三線と地域の踊りなど地域行事に精通する教室を残し、講師の負担を少しでも減らすため、1教室に講師を複数名配置し、一人の負担を減らすことを行いました。そして、学校の教育課程に位置付け、学校・教育委員会・地域が一体となって互いに学び合う取り組みへとシフトチェンジを図りました。

## 3 伝統文化学習の制定

### (1) 当初の取り組み

前述の背景や課題を踏まえ、伊平屋村では平成24年より「伝統文化の日」を毎月第3水曜日に位置付け、学校・教育委員会・地域が一体となり、各公民館活動において、地域の踊りや三線など伊平屋村の歴史文化の継承と地域の世代間の交流を目的として制定されました。

それぞれの地域在住の講師により、地域の伝統芸能を地域の子どもたちが学ぶ取り組みは、世代間交流に大きく役割を果たし、教室以外でも挨拶や日頃の会話から学ぶ姿勢が見えてきました。

当初は、様々な教室を開設しており、舞踊や三線の他、編み物教室や方言教室など地域人材を活かした言わば生涯学習のような取り組みを行っていました。

しかし、伝統文化学習の取り組みを継続して行っていく中で、多種多様な教室を実施しているため、課題がみられるようになりました。1教室に1講師を設定している教室は、高齢の講師は通院のため休む場合や、モズ



先生と生徒と一緒に練習



校長が指導する様子



練習前に着付けを行う

この取り組みで児童生徒の管理を行っていた学校は、地域の伝統文化をともに学ぶ教員が増え、ともに学ぶ姿勢は相乗効果を発揮し、子どもたちの意欲を引き出しています。



小学生から中学生と一緒に教員が練習する様子

低学年の取り扱いについても、集中力や習熟度などの課題がありました。そこで、遊びながら伝統文化に触

れる機会として「方言教室」や「物作り教室」を開設し、遊びの中に学びを取り入れ、創意工夫を試みました。



物作り教室

### (3) 伝統文化学習発表会

年間を通じて伝統文化学習を学んだ発表の場として、伝統文化学習の日発表会を成果発表として12月に実施しました。発表会に向けて練習を取り組むことにより、児童生徒はもちろんのこと、講師もともに目標達成を得られる機会として開催しました。令和7年度は、インフルエンザ蔓延のため中止となりましたが、毎年度保護者はもとより、地域住民が児童生徒の成果を確認できる機会となっており、毎年多くの住民の方が発表会へ足を運んでくださいます。



発表会裏側

他の地域の伝統文化を見る機会は、豊年祭が同時期



学習発表会

に行われることもあって、見る機会が少なくありません。しかし、伝統文化学習発表会においては、一同に地域の舞踊が披露されるため、同じ舞踊でも少しずつ変化があり、とても見応えがあります。

講師の方々も子どもたちが学んだことの集大成として発表でき、達成感がある機会となっており、アンケート調査では「子ども達が毎時間真剣に取り組んでくれ、互いに教え合う場面が随所にみられ微笑ましい。」や「全くできないところから、人前で発表できるまで子ども達の成長がみることができた。」とあり、改めて学校・教育委員会・地域が連携した集大成であると感じています。

## 4 おわりに

年々人口減少していく中で、行事の簡素化や廃止などは避けて通れない現実問題です。しかしながら、本村のような学校・教育委員会・地域が一体となり文化を継承することにより、地域コミュニティの形成を図りつつ、伝統文化を継承し、後継者育成へとつながっています。

教室を開講する地域の先生方は、とても熱心に児童生徒へ指導していただき、教室では講師として、地域にかえれば地域のおじちゃんおばちゃんとして、伝統文化学習の日を通じ、世代を超えた世代間交流がうまれています。



地域講師による指導



講師が指導する様子

現在では、伝統文化学習をきっかけに三線や舞踊に興味関心を持ち、芸能を学ぶ子どもたちも増えました。

今後は、伝統文化学習で学ぶ側であった児童生徒が講師へと成長し、次世代へと継承することで、伝統文化継承や地域コミュニティの形成を図り、「持続可能なむらづくり」が実現できるよう取り組んでまいります。